

世界的に障害生存年数が増加、その主な原因は腰痛とうつ

疾病や外傷の発症率や障害生存年数を把握することは国や地域の、そして世界的な健康に関する政策に必要不可欠である。本研究では、188カ国を対象とした、世界の疾病負担研究（Global Burden of Disease Study）2013より、1990～2013年のデータを用い、301の急性・慢性疾患や外傷と2,337の後遺症の発症率や罹患率、障害生存年数について分析した。

5,620例のデータが分析の対象となった。分析の結果、疾患や外傷の発生率・罹患率は高く、後遺症のない人の割合は低かった。共存症は年齢とともに増加し、また、1990～2013年にかけて増加していた。急性後遺症の発生については、感染症と短期外傷によるものが大部分で、2013年には上気道感染症と下痢症が20億件以上、永久歯う蝕による歯痛が20億件であった。一方、慢性後遺症の発生については、多くが非感染性疾患によるもので、無症候性永久歯う蝕が24億件、緊張性頭痛が16億件であった。障害生存年数は男女とも人口および加齢とともに増加し、1990年には5億3,760万年だったが、2013年には7億6,480万年となった。障害の主な要因としては、全ての対象国で腰痛と大うつ病性障害が上位10位に入っていた。アフリカのサハラ以南の地域ではHIV/AIDSが障害生存年数増加の顕著な要因となっていた。

今回の結果から、世界人口の高齢化により、疾病や外傷の後遺症を有する人が増えていることが示された。健康システムにおいては、非致命的疾患や外傷への注意が必要である。とくにアフリカ・サハラ以南以外の地域では、疾病負担は非致命的疾患や外傷によるものへと移行している。疫学的動向調査や各国の格差を理解することで、今後の健康に関する新たな取り組みが導かれるであろう。

出典：Lancet. Published online Jun 5, 2015; pii: S0140-6736(15)60692-4